



「これでも罪を問えないのですか！」——福島原発告訴団50人の陳述書

(福島原発告訴団編・金曜日出版発行・800円+税)

『原発再稼働絶対反対』

(再稼働阻止全国ネットワーク編・金曜日出版発行・800円+税)

〈3・11〉原発震災以後の、拡大し深化し続いている反(脱)原発運動のうねりがうみだした2冊の本をここで紹介する。

一つは、「福島原発告訴団編」の『これでも罪を問えないのですか！——福島原発告訴団50人の陳述書』である。

「まえがき」で落合恵子は、こう書いている。

「この陳述書に記されている言葉のひとつひとつこそが、言葉にはできなかつた揺れや交錯するさまざまな感情が、福島のひとたちの悲しみであり、憤りであり、無念さである。それらのどれひとつにさえ、この国は、事故を起こした東京電力は向かい合つていな

い。応えてはい

ない」

「言いたいこ

とはひとつだけ

……もとの暮ら

しを返せ……そ

れだけだ」。日々



仮設住宅から通い、野馬追の馬にやる飼い葉を切りながら、そう言つたひとつの掠れたつぶやきをわたしは忘れない。だからこそ、せめて、とわたしは要求する。／人の心をもつて、向かい合うことを。／これは『お願ひ』ではなく『要求』である」

人の心をもつて、憤りと無念の言葉に向かいあわなければならぬのは、告発されている「原子力ムラ」の住人たちだけではなく、私たち一人一人である。多くの人々が、命を奪われ、生活をまるごと破壊され続けている福島の現実から発せられる具体的な声。こんな被害をうみだした人々（責任者）が何故、裁かれないのか、という怒り。被害者が自ら立ち上がりつて発した、この声を共有しない反原発運動はインチキだ。読み終わって、そういう思いを強くした。

ラストに「裁かれる東京電力と原子力ムラ」というルポライター明石昇二郎の「告訴団」の活動の軌跡を整理した論文もそえられていく。そして団長の武藤類子「あとがき」には、こうある。

「私たちは馬鹿にされて生きていってはいけません。今この世界を変えていかなければなりません。今この世界を変えていかなければなりません」

ままに、なんと原発再稼働へ向けて暴走しているのだ。

もう一つの「再稼働阻止全国ネットワーク編」の『原発再稼働絶対反対』には泊六カ所・東通・女川・福島第一・柏崎刈羽・東海第二・横須賀（原子力空母）・浜岡・志賀・ふげん、もんじゅ・伊方・玄海・川内・島根・大間原（主に〈3・11〉以後のそれ）。

「まえがき」に収められた、このネットワークの結成宣言（2011年11月10日）には、こうある。

「しかし、まちがいなく準備されている原発再稼働の嵐のような攻撃に抗するためには、各地一つ一つの闘いが孤立してたたきつぶされてしまつていいわけがない。各地の再稼働をストップする闘いを結んで、原発ゼロ社会を実現するという一点で結びついた全国的な「組織」運動こそが今つくりだされなければならないはずだ。それは各地の特殊な条件をふまえた対等・平等な運動の連合であり、力づよい運動経験の相互共有の場所でなければなるまい」

各地の闘いを「結ぶ」「力づよい運動経験の相互共有」のプロセスが進んでいることを実感させるパンフレットである。

必読といつても、いいすぎではない2冊である。

安倍政権は、福島の、こうした状況をその

天野恵一

（あまの・やすかず／本誌編集委員）